



癒しとやすらぎに満ちあふれた 手づくり感のある新しい病院づくり。

独立行政法人 国立病院機構は、香川県善通寺市にある2つの病院の統合整備を進めてきました。そして、2013年5月、香川小児病院と善通寺病院が一つになり、四国こどもとおとなの医療センターがスタート。成育医療分野と成人医療分野を機能統合し、さらに地域の要望の強かった「循環器病センター」「脳卒中センター」も新たに整備されました。救急医療の砦として、全国で5番目となる「小児救命救急センター」にも指定されています。



1F外来のこどもトイレ。こどもトイレブースの扉は、柔らかいアーチ型である。スタッフのユニフォームも、こどもが親しみやすいキャラクターの入ったものを採用している。

「誕生」から「看取り」まで ライフサイクルのすべてを見守る場所。

新たに建てられた医療センターは、子どもを対象とした成育医療分野と、循環器病を中心とした成人医療分野の急性期医療を広域的に行う四国エリアの中心施設であり、災害拠点病院です。子どもが生まれて成長し、おとなになってまた次の世代に命の灯をつなぐ、「ひと」のライフサイクルすべてを見守っていく場所であり、施設はたくさんの癒しで満たされています。

その特徴の一つが、設計時から導入を決めていたホスピタルアート。多くの子どもたちからお年寄りの方々まで、さらにアーティストも参加してつくった外壁画や病院内のアートには、人の心をやすらぎへ導く効果があります。そのモチーフには、普通寺市の市の木であるクスノキも用いられ、まさにこの地域ならではの新しい表情が、患者さんやご家族の安心の拠りどころとなっています。



病院の外壁には、誰もが癒される、子ども絵づくりに参加した壁画が描かれている。

【四国子どもとおとなの医療センター】

- 竣工年月 / 2013年1月
- 所在地 / 香川県普通寺市仙遊町2-1-1
- 施主 / 独立行政法人 国立病院機構
四国子どもとおとなの医療センター
- 設計 / 株式会社山下設計
- 病床数 / 689床
- 延床面積 / 約54,600m²
- 構造規模 / 地下1階、地上7階建て



病院内には、ニッチと呼ばれる飾り棚があちこちに設けられ、患者さんが作った作品が飾られたり、毎週水曜日に花が替わるなど、時間や季節の変化を感じさせるスペースとなっている。心のこもったふれあい空間であり、ニッチにちょっとしたプレゼントが入っていることも。

Voice 院長先生からの声

子どもとおとなの違いに配慮し、外来の入口を2つに分けています。



四国子どもとおとなの医療センター
院長
中川義信さん

香川小児病院といふ子どもの病院と、普通寺病院といふおとなの病院が、一つになりました。誕生から看取りまで、すべての年齢層の患者さんに、ゆったりと治療を受けていただける環境をつくりたいと考え、病院の名前もそういう思いから付けています。おとなと子どもの違いは、はっきりしていますから、一般的な総合病院では一つの外来入口を、ここでは成育入口と成人入口に分けています。子どもの病気は感染症が中心であり、お年寄りの病気はまた違うという医学

的な理由もありますし、同じおとなでも、子どもの声に癒される人だけではなく耳障りだという人もいる…そうした理由もあります。ただし、2つに分離するのではなく、検査や放射線、手術などの場所は中央にまとめました。救命救急センターも、おとなと子どもを2階の1ヵ所にまとめ、救急車が直接2階のほうに入れるようにしています。そうした動線やホスピタルアートも含め、他所にない病院を自分たちでつくりあげたと、スタッフにも誇りを持ってもらえる場所ではないでしょうか。



1F成育外来のロビー。白い木のオブジェは、上がクルクル回転するからくり時計でもあり、太い幹の中は子どもが入れる小さな図書室になっている。子どもの知的興味を惹く場である。



成育エントランス 成人エントランス

1F 平面図



1F外来の女性用トイレ。女性用のブースの色はピンクベージュ、男性用のブースの色はブルーグリーンとなっている。



1Fオストメイト対応の多機能トイレ。ベビーシートやベビーチェアなどが設置されている。

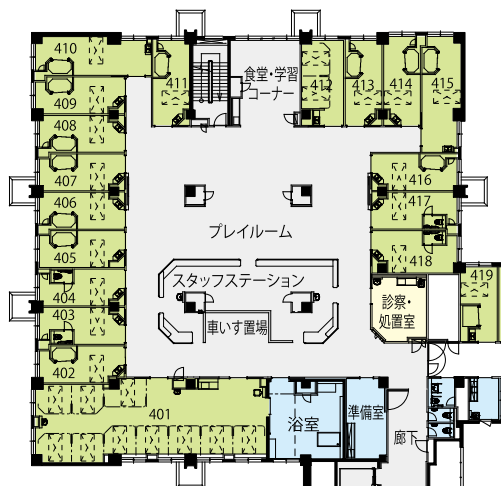


1F外来の多目的トイレ。壁掛け便器、巻上巾木など、汚れても清掃のしやすい空間になっている。

子どもとおとなの違いにも配慮した トイレ・水まわり空間づくりを推進。

小児病棟の個室では、ベッドは窓側に寄せず、入口側に配置。スタッフが部屋全体を見渡しやすく、ケアしやすいという大きなメリットがあるとともに、トイレ・シャワーユニットの奥のスペースは、付き添いのご家族の方のプライベート空間にもなります。また、成人病棟の個室では、ユニットを入口側に配置することで、ゆるやかにプライバシーに配慮しています。

また今回の施設づくりでは、子どもが使うトイレは、子どもの幅広い年齢に合わせて、便座の高さや背もたれの位置が、どこがいちばん使いやすいかを丁寧に検証。手すりの幅も、おとなより狭くするなどの工夫が施されています。



4F小児病棟平面図



小児病棟の病室は、個室が中心。気持ちの明るくなるようなデザインが施されている。なお、院内のほとんどの場所にLED照明を採用している。



小児病棟の個室に設けられた、八角形のトイレ・シャワー空間。壁の直角をなくすことで見通しがよくなるとともに、ベッドの移動もスムーズにできる。



小児病棟に設けられたサニテーション室。トルネード洗浄の汚物流しが設置されている。



廊下の手すりは上下2本で、誰にでも使いやすい。明るい色で意匠性の高い腰壁は、ストレッチャーガードも兼ねている。



小児病棟のフロア中央のスタッフステーション。その前には、入院している子どもたちが交流できる、広いプレイルームがある。

Voice 看護部長さんからの声

患者さんの生活向上がはかれます。



看護部長
松本万里子さん

トイレの空間が広くなり、設備も充実したので、介助がしやすくなりました。使いやすい洗面台で手洗いを習慣づけたり、レイアウトの工夫で以前より個人のプライバシーを保てるなど、考えて作り込んだ設備や空間が、患者さんの毎日に良い影響をもたらしていますね。

Voice 副看護部長さんからの声

統合への過程に意味がありました。



副看護部長
武森八智代さん

2つの病院が1つになる大きな変化でしたが、両病院の師長間での交流や、研修会での意見交換など、スムーズに統合するための事前準備が重ねられました。ケアの違いなどもありましたが、話し合いながら一つのものをつくり上げる、意味のある過程でしたね。

Voice 副看護部長さんからの声

清潔に使えるようになりました。



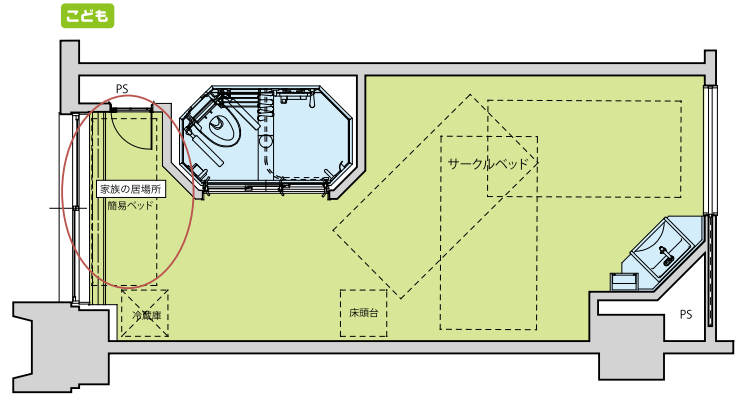
副看護部長
富永章子さん

「便器きれい」という自動のプレ洗浄の機能があって、汚れが付きにくいのがとてもいいですね。便器のふたをなくしたことも、清潔に使えるのでよかったです。とにかくトイレがいつもきれいで白く輝いて見えます。居心地のいい空間になりましたね。



おとぼ

成人病棟の個室では、小児病棟と違って、ベッドは窓側に配置。なお、高齢で転倒しやすい患者さんのベッドサイドに「てんと虫」のシールを貼るなど、スタッフが情報を共有化している。

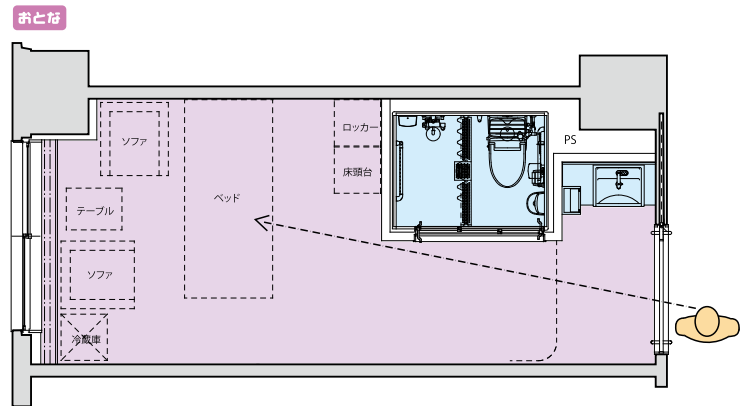


4F小児病棟 個室平面図



おとぼ

成人病棟の個室。入口横に洗面台があり、その隣に4角形のトイレ・シャワー空間が設けられ、必要な手すりなどが備えられている。



6F成人病棟 個室平面図



おとぼ

明るくかつ落ち着いた色彩が施された、成人病棟のスタッフステーション。

Voice 事務部長さんからの声

本当に患者さんにご満足いただくためには
ハートとハードが融合することが大切です。



四国こどもとおとなの
医療センター
事務部長
宮本一男さん

新しい病院では、私たちの病院の理念にもあるように「あたたかい心と思いやり」というハートの部分と、快適な施設としてのハードの部分の融合を心がけました。建物が大きくなってきれいになっただけではダメで、本当に患者さんにご満足いただくためには、患者さんにやさしい病院の風土や、スタッフが医療人として成長できるフィールドであることも大切になってきますね。

病院のメンテナンスについては長期的な視点で考えて、照明のほとんどをLEDにし、床もノンワックスのものにしました。

病室やスタッフステーションなどは広くなりましたが、動線が効率的に考えられていますから、スタッフの移動はスムーズになっているかもしれません。万一の広域災害に備え、災害拠点病院としての社会的使命を果たすために、自衛隊、地方自治体、そして病院が三位一体となった取り組みも行き、共同のトレーニングも考えています。地元のみならずと共歩むという病院の理念を実現するためにも必要なことですね。

Voice 設計担当の方からの声

お父さんお母さんの場所もつくりました。



株式会社山下設計
東京本社
第1設計部 主管
三浦敬明さん

今回、こどもの急性期病棟に相応しい病室として、看護師さんが扉を開いた時に部屋の中全体が確認でき、迅速に治療ができるレイアウトとしました。また、こどもの部屋とはいえ、そこはご家族の部屋にもなるので、お父さんお母さんが眠ったり本を読んだり、自分のことができる場所も必要です。八角形のトイレ・シャワーユニットの位置を調整し、病室の窓側にニッチ状のスペースをつくることで実現しました。